

魂を売るということ、抜かれるということ

渡辺 久義

2017/4/03

ある程度の年配者には、「魂」という言葉にこだわりがあるはずである。それは数十年前、唯物論が知的世界を支配していたころ、こんな言葉は死語のように思われ、「意識（現象）」というような言葉しか使えないかのような雰囲気があったからである。それにはダーウィン進化論が大きく影響していた。よく考えれば、この浅はかな唯物論的生命論は、生命のごく表層（同一種内の変種など）を見たときには有効かもしれないが、生命や意識の深いレベルを説明することはできない。これは、「彼ら」が我々に押し付けた、我々の足を縛るための謀略であったと考えるべき、状況証拠はいくらでもある。

昔の人の言った通りの「魂」という概念によらない限り、心の深いレベルを考えることはできない。「ペドゲイト：パンドーラの箱が開かれて・・・(1～5)」を、一応の結論まで訳してみ、それを考えた。論者は、この恐ろしい陰謀団の考えていることは、究極的にペドフィリアを世界的に「合法化する」ことだと言っている。誰もぎよっとするだろう。年端のいかぬ子供を性の相手にすることは、殺人以上の重罪と考えてよい。なぜなら心身の傷を一生背負わせるからである。我々普通人の反応は、おそらく、「そんなことは誇張だろう。よしんばその通りだとしても、そんなことは我々が許さない」というものだろう。これは両方とも、大いに怪しい、甘い希望的観測だと言わねばならない。論者が言う通り、彼らはまず、LGBT の許容というような比較的受け入れやすいものから、なしくずしに、そこへ持っていこうとしている。まず、結婚の多様性というところから始め、結婚の意味そのものを彼らは崩そうとしている。そしてこれに“乗る”人々が非常に多いのが現実である。

彼らは聡明かつ巧妙かつ執拗であって（何百年も昔からこれを狙ってきた）、我々はとうてい彼らの知略には及ばない。残念だがこれは認めなければならない。彼らが破壊しようとしているのは何か？ それは我々の人間的中心である「魂」だと言ってよいだろう。そんなことをして何になるのか？ 何か儲かるのか？ 何も利益があるわけはでない。破壊自体が彼らの目的である。それが**悪そのものである神**に仕える、彼らの使命だと言ってよいだろう。

では我々に、彼らの聡明さや巧妙さ、また執念に対抗して戦うだけの、精神力や判断力があるか？ 残念ながら、それもないと言わねばならない。これは、彼らが用意周到な、巧妙な愚民政策によって、それと悟られることなく我々をコントロールして、骨抜き、つまり魂抜

きにしてきたからである。そして今まさに、彼らの必死の長期計画が実らなければならない時期にきている。これは外面的には、ロシア・中国を滅ぼして世界制覇を果たすことであり、内面的には——現実的にも象徴的にも——ペドフィリアの普遍的合法化によって、人間ものの魂を抜くことである。

では——「抜かれるほどの魂はありや」ということになる。これを言うのはあまりにも寂しい。だから、今、我々に課せられているのは、自分がどういう状況に置かれ、どういう世界に生きているかを自覚すること、本来の自分に目覚めることでなければならない。人間は3つの部類に分かれる。我々をコントロールするごく少数の人間、コントロールされる大多数の民衆、それにその中間の、メディアや政府要員、団体や企業や学者などである。この中間の者たちは、コントロールされながらコントロールしている。彼らは、自分が悪に加担していることを——程度の差はあるが——知りながら、私利のためにそれを続けているのだから、「魂を売る」者たちである。ローマ・カトリックの法王以下の聖職者は、典型的に魂を売って、死後も悪魔の暗黒世界を指導する人たちだろうか？（これは知らない。）アメリカの連邦議会も、全員がロシアを撃つことに賛成しているというから、これは集団で魂を売る者たちである。このような3つに分かれる人間の構図を知っておくだけで、「抜かれるほどの魂はありや」ということにはならないであろう。

私自身、ほんの数年前までは、恥ずかしながら「悪魔に魂を売る」とか「悪魔との契約」などということは、現実性のないフィクションだと思っていた。イルミナティについて、特にその離脱者の告白を読んでみて、それが現実だと実感できるようになった。と同時に、人格的な悪の極限（純粹悪）というものが実在し、世界を支配しているなら、その対極の存在もなければならぬと考えるようになった。

ところで、すでに述べたことだが、共産主義の4つか5つの大きな柱となる方針——「（ルシファー教を除く）宗教の廃止」「私有財産の禁止」「家庭の廃止」「国家（愛国精神）の廃止」——は、全くそのまま、イルミナティ結党のときの、世界を征服するために、民衆に押しつけるべき項目であった。これは民衆を救うためのもの、特に無産階級に権力をもたせるために必要なアジェンダだとして、偽って喧伝されたが、これは彼らを奴隷化するための手段であった。そして、この4つの項目に共通する狙いは、当時、共産主義が唯物論と同義語だったころに我々が考えていたより、遥かに恐ろしい、人間から魂を抜くことだった。